

# 御細工所跡緊急調査概報

(城西小学校校舎建設工事に伴う緊急調査概報)

昭和60年3月

沖縄県那覇市教育委員会

## は し が き

本書は、那覇市教育委員会が城西小学校校舎建設工事において発見された御細工所跡遺跡の校舎建設工事に伴う緊急調査の概報です。

同校舎建設用地の同校グラウンドは、1700年に作成されたと推定されている首里古地図には御細工所と表記されているが、その後の土地利用の状況とくに戦前、戦後のグラウンド拡張工事によって多方が破壊されていると見られていました。

しかし、校舎建設工事の第一期工事の土木工事の共同溝の基礎掘り作業によって、スラグ層、尖底鉄器が発見されました。基礎掘りされた溝の断面を注意深く調べると、陶磁器片や黒色瓦が多量に包含されているのが確認されましたので、那覇市文化財調査審議委員へ調査を依頼しました。その結果、発掘調査の必要ありと報告がありましたので沖縄県教育委員会へその旨を報告し、調整の結果予備費を充用して緊急発掘調査を実施しました。そして現地での発掘調査は終了しました。しかし出土遺物が当初予想した以上に多量なので整理作業がまだ完了していませんが、とりあえず調査の成果の主たるものを概報し、本格的な調査報告は後日に期する考えであります。

今回の発掘調査にあたっては本市文化財調査審議委員の真栄平房敬氏、知念勇氏にご協力をいただきましたので深く感謝申し上げます。尚、今後とも多くの方々のご指導、ご協力をたまわりますことをお願いして発刊のことばとします。

昭和60年3月

那覇市教育委員会

教育長 稻 嶺 盛 國

## 例 言

1. 本報告は那覇市教育委員会が城西小学校校舎建設工事に伴う緊急発掘調査として、市の一般会計予算の予備費を充用して実施した成果の概報である。
2. 発掘調査の関係者はつぎのとおりである。

調査責任者	伊波 静 男	(那覇市教育委員会教育長)
調査事務局	大城 昌 三	( " 社会教育課長)
	伊元 源 治	( " 社会教育課文化係長)
	仲地 洋	( " 社会教育課主事)
	比嘉 了	( " )
	野原 実	( " )
調査員	仲地 洋	( " 社会教育課主事)
調査補助員	古塚 達 朗	( " 社会教育課非常勤)
3. 資料整理は下記のメンバーで行なった。

	棚原 俊 二	(遺物整理用非常勤)
	上原 エリ子	( " )
	與座 直 子	( " )

写真撮影 仲地 洋
4. 本報告書に文化財調査審議委員の真栄平房敬氏の報告書を掲載した。
5. 資料の整理がまだ完了していないので、出土遺物の統計、図化等の詳細は後日の本報告書に行なう。
6. 本報告書の執筆と編集は仲地が担当した。

# 目 次

## 第1章

第1節	位置と変遷	8
第2節	調査に至る経過	8
第3節	文化財調査審議委員の調査報告	9
	御細工所跡の歴史調査	

## 第2章 調査の概要

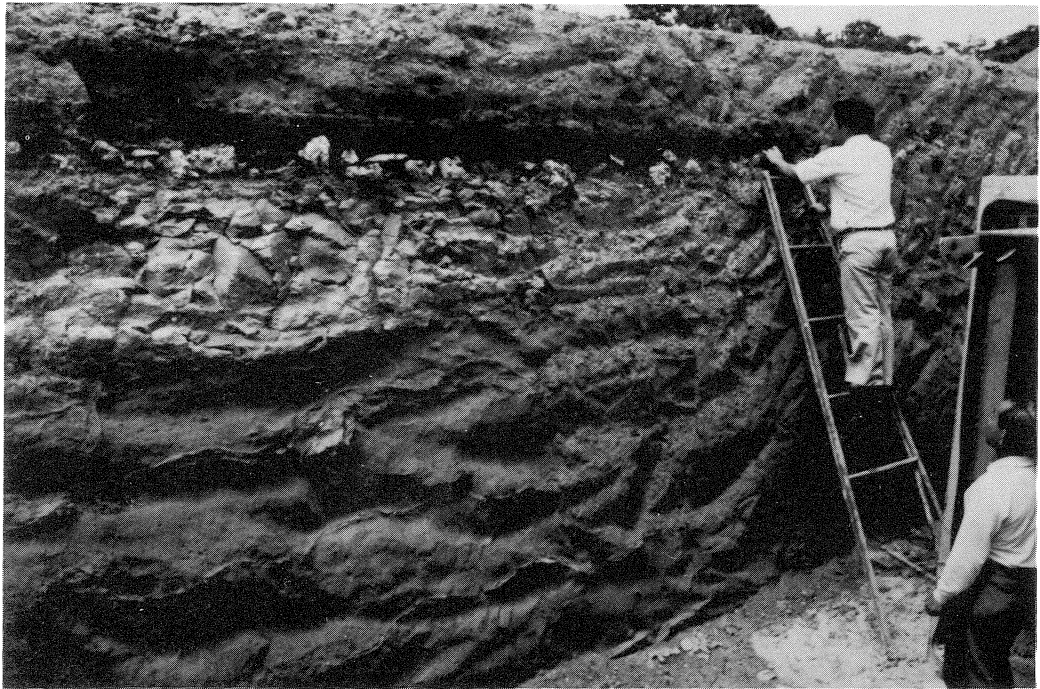
第1節	調査の経過	11
第2節	確認された遺構・遺物	11

## 第3章 資料

(1)	新聞資料	14
(2)	図版	23



調査がはいる前の城西小学校グラウンド



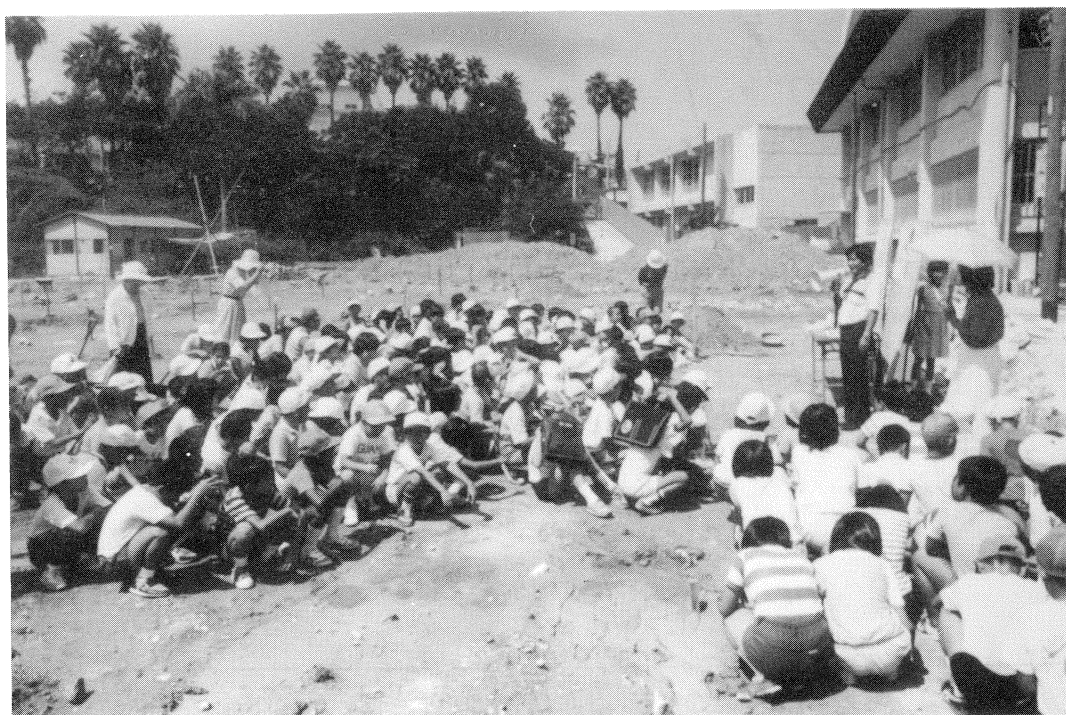
工事の途中で発見されたスラグ層



工事のための基礎掘りで地山が確認された



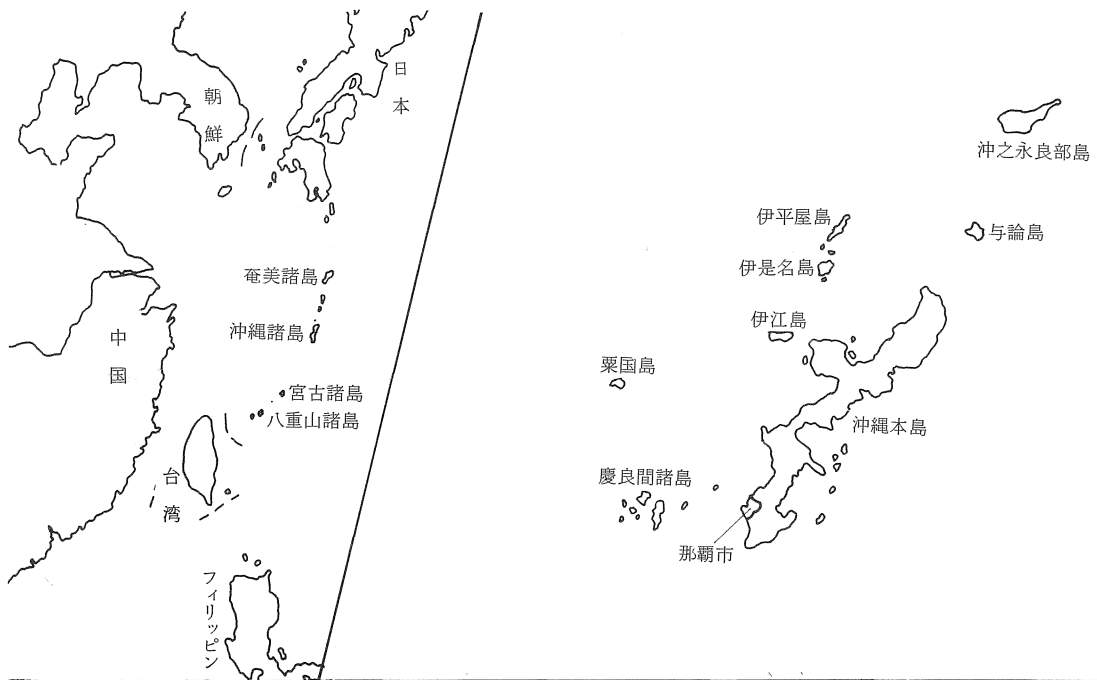
工事の基礎溝，戦前の多量の赤瓦の中から尖底鉄器と礎盤が出土した



発掘調査を見学する城西小学校の生徒



発掘作業に従事した方々

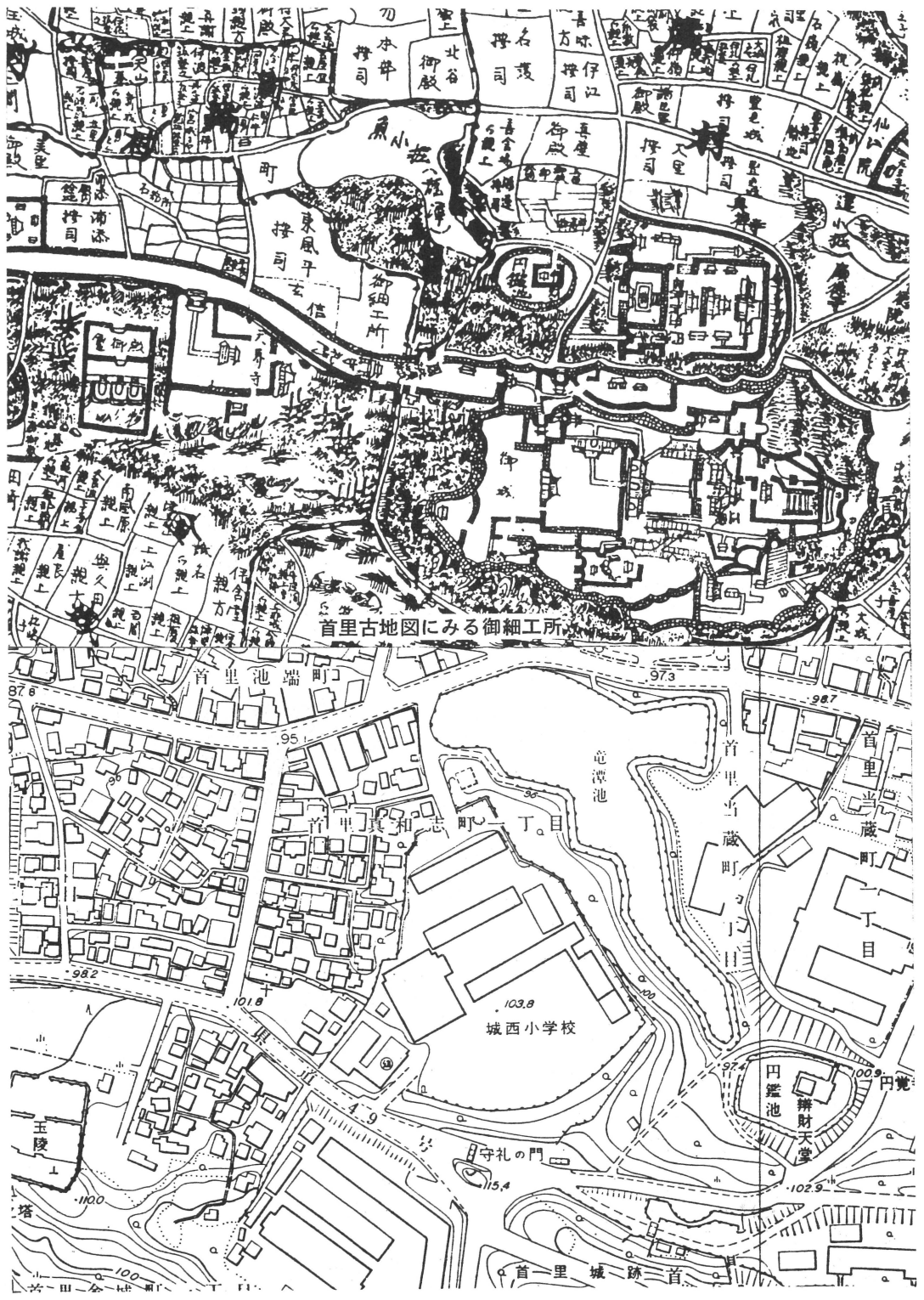


第1図 那覇市及び御細工所跡（城西小学校）





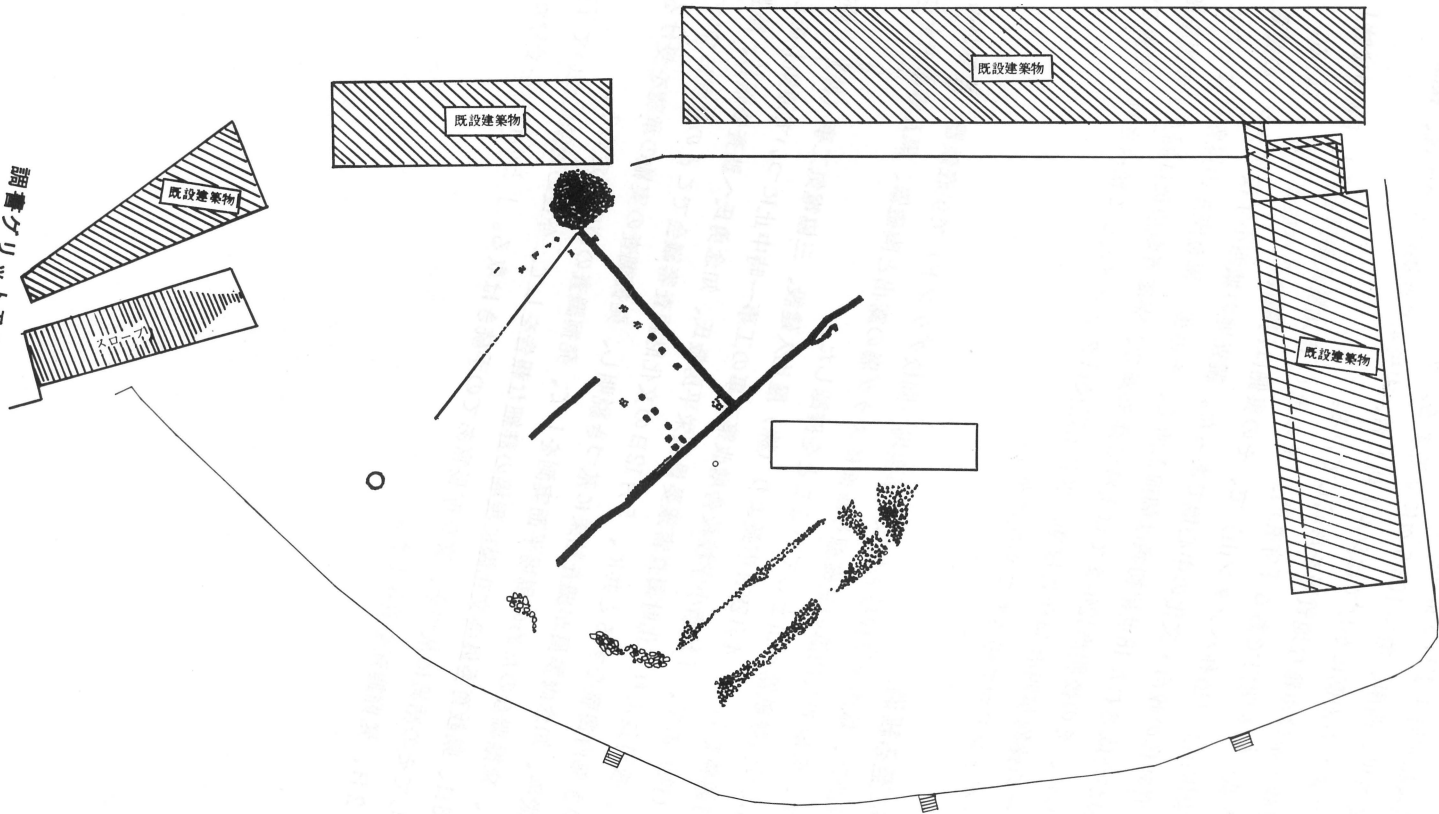
首里城跡左手前に位置した御細工所跡（城西小学校）



調査地現況図



調査ゲリット及び遺構平面図  
-7-



- P
- O
- N
- M
- L
- K
- J
- I
- H
- G
- F
- E
- D
- C
- B
- A

43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13

0 2 3 4 5 10 15 30m

## 第1章

### 第1節 位置と変遷

御細工所跡は那覇市首里真和志町1丁目5番地の城西小学校グラウンドに所在する。

那覇市の東北部にあたる首里の西南、標高103.5mに立地する。グラウンド一帯の東北側は微粒砂岩の風化物（ニービ）、南東から南側にかけてはシルト粘土層、中央より西側にかけては、礫混りの粘土層となっており地域一帯は複雑な地質層を形成している。

遺跡の東南側には首里城への玄関口である「守礼門」、その後「園比屋武御嶽石門」、「首里城跡」と続き、また東側は「安国山」（俗称ハンタン山）で、その裏側は円鑑池及び龍潭となっている。

この周辺一帯は、王府時代の政治・文化の中心地であった。調査地の城西小学校グラウンドの変遷を見ると、首里古地図が作成された18世紀初頭は御細工所で、その後、黒金座主の屋敷になったという伝承があり、さらに、その後明治12年までは王府の薬草園で、廃藩置県以後は婦女子の授産施設の職工場となり、その建物が明治34年に取壊わされて以後はグラウンドとして使用され、東側の安国山の一部が削られグラウンドが拡張されて現在に至る。

### 第2節 調査に至る経過

昭和59年4月26日、城西小学校校舎建設工事現場（同校グラウンド）で尖底鉄器、瓦等が出土した情報を受けて、現場で共同溝の基礎掘り断面にスラグ層の露出と陶磁器、黒瓦等の出土と、グラウンド北西隅より尖底鉄器が出土していることを確認した。

その後部内調整をして、4月28日市長より（株）屋比久建設、三協電気工事（株）、沖縄ナショナル特機（株）あて、「城西小学校校舎増改築工事の工事一時中止について通知」をした。

5月1日、教育長より文化財調査審議委員真栄平房敬氏、知念勇氏へ調査依頼し、調査報告の結果に基づき部内調整をすると共に、5月12日の文化財調査審議会でのこの状況について報告をして、真栄平、知念両委員が調査結果に基づき説明し、発掘調査の実施の承認を受ける。

そして、発掘調査のための現場平面実測をして、発掘調査の範囲を定める。

5月16日、県教育委員会文化課に現場の詳細な報告をして、今後の対策について「至急に調査を実施してその結果に基づき、文化庁長官あての手続きは取る。」との指示を受けた。

6月2日、発掘調査を着手した。

### 第3節 文化財調査審議委員の調査報告

#### 御細工所跡の歴史調査

那覇市文化財調査審議委員 真栄平 房 敬

##### 1. 文献資料

- (1) 17世紀に作製された首里古図にはこの地点は〈御細工所〉となっている。
- (2) 「南島風土記」には次のように記されている。

『……明治初年の伊地知の首里図にはこの地点に上菜園と注してあるが、その後女子補習の授産場が置かれ始めて高機の技術が授けられ、俗に織工場と呼んでいた。この地点はもと御細工所の在った処で……』

- (3) 「那覇市史通史篇」（362頁）には

『……1903年（明治36年）にあった工場のうち……首里区字真和志に「沖繩織工場」があった。』と記されている。

##### 2. 古老の話

喜舎場カヨ（明治34年生、首里尋常小学校女子部卒）

国吉ツル（明治36年生、首里尋常小学校女子部卒）

この2名の方の話は全く同一内容で次の通りである。

- (1) 現城西小の裏門（守礼門の下手）を入ると右手（東側）に1教室ぐらいの瓦葺の平屋があって織工場（ショウコウバ）と呼ばれ、20～30才ぐらいの婦人が高機を習い織工場人数（衆？）と呼ばれていた。
- (2) 当時の女子部の校舎（首里市制記念誌によれば明治21年6月新築）は現城西小の校舎のある所と同じ場所（竜潭側）である。  
校舎の配置は中庭を四方から取り巻いて四角形に配置されていた。（明治41年入学当時）  
正門は現城西小正門と同一場所で大多数の生徒は正門から通学し、裏門を通るのは金城、崎山辺りの一部の生徒であったから、正門から入る生徒は織工場には気付かなかったであろう。
- (3) 明治44～45年頃、織工場は撤去され、その跡はしきならされて、下の運動場と呼ばれた。

##### 3. 調査員自身の記憶

- (1) 大正の終わり頃、姉（大正3年生）に従って首里第二小学校に遊びに行った時（度々）は、上の運動場と下の運動場は段差が約3mあり、面積は二つともほぼ同じぐらいの広さであった。
- (2) 昭和初期の小学校時代の記憶  
昭和2～3年頃までは上下それぞれの狭い運動場では運動会ができなかったので、第一、第二小学校とも師範学校の記念運動場（旧琉大理工学ビルの建っていた所）で、運動会が行われた。
- (3) 昭和3年頃から上の運動場を削り、下の運動場拡張工事が進められ、戦前、戦後まで少しずつ続行された。
- (4) 戦後、琉大女子寮を建てるため上の運動場の南の丘まで大きく削られ、上の運動場の姿は完

全に消えた。

#### 4. まとめ

「御細工所」に関する文献は残っていないが尚敬王代以前の貝摺、漆工芸、金工等を含む王府御用品の総合製作所であったろうと思われる。

尚敬王代になって、縫い物、工芸、漆工芸、金工等の役職が明確に分けられ、小細工奉行、貝摺奉行等と御用品を作る奉行が整備され機構が細分化されていった。のちの、貝摺奉行の跡地といわれている旧師範学校附属小学校跡から貝摺りに使ったと思われる夜光貝が戦後大量に出土している。今回の調査において、御細工所のもと思われるものが、①「麗瓦匠造」の銘のある高麗瓦、②古寺にみられるような柱の礎石、③青花文様白土陶器、等が出土しており今後の詳細な調査報告が期待される。

## 第2章 調査の概要

### 第1節 調査の経過

第1次調査が昭和59年6月2日～16日、第2次調査が同年7月6日～8月12日まで実施した。

第1次調査はスラグ屑を中心に共同溝に平行に発掘調査予定面積 233  $m^2$  に 4  $m \times 4 m$  を1グリッドとして設定する。グリッド番号は北から南へ1・2・3……、東から西へA・B・C……、とした。

発掘はまず、重機によって表土を平均約50  $m$  の深さまで除去した。スラグ屑等一部の包含層を除いて調査地全域が攪乱されている状態であるので、層序については確認することができなかった。ユンボで表土をはぎ取った後の発掘を開始する。手始めにH-30・G-30からH-26・G-26に向かって掘りはじめる。H-31・G-31のピットから夜光貝の貝殻が集中して出土し、貝摺奉行所跡を窺わしめる。H-29からD-31にかけて1段のみの石組が出土。

D-13から25kg不発弾出土、当蔵派出所から警官が出向き撤去、H-27・G-27からD-13にかけて乱雑な石灰岩遺構出土。(H-27からD-13にかけての発掘。)

K-32で排水溝が確認されたのでM-35に向けてユンボで表土をはぎ、人力で排水溝の延長線上の発掘をする。

J-31からF-35・M-35周辺の発掘、J-31で50kgの不発弾出土、当蔵派出所に通報、後日自衛官が撤去した。

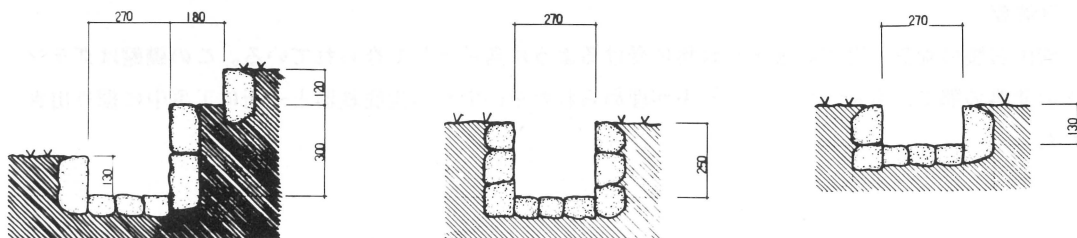
M-37からK-37の陶器製水道管の発掘、H-40に古井戸を掘り当てる。井戸は水道ポンプの鉄パイプが使用時のまま。古井戸は12  $m$  まで掘り下げると、不発弾が2個出土し撤去したが、これ以上掘り進むと危険なのでこれより下の発掘は中止した。

J-K-30に排水溝が延びるのを確認、K-26から南に向けて全面的に発掘した。

### 第2節 確認された遺構・遺物

調査の結果確認することができた遺構は、グラウンドのやや中央を北側より東南に平行状に延びる雑石組と、グラウンド中央よりやや南西側を東西、南北に走る石造排水溝、それに面した石灰岩の風化物を敷いた基礎、グラウンド南側の古井戸と井戸から北西へ延びる陶器製の水道管である。

遺物は「癸酉年高麗瓦匠造」の銘入りの古瓦をはじめ、近世の瓦、磚、礎盤、石器(材)、鉄製品、陶磁器、古銭と激戦地を裏付ける多くの不発弾や小銃等の遺品が出土したが、整理作業が完了していないので今回は若干記述する。



排水溝断面詳細図

## 1. 遺構

### (1) 平行線に延びた雑石組

平行線上に延びた雑石組で東側の一列は、北側に遺物を多量に包含した雑石敷から東南の方へ東側の安国山の丘を形成していたと考えられる微粒砂岩の斜面にそって延びている。

### (2) 石積排水溝と石灰岩風化物を敷きつめた基礎

南北に延びる石積の排水溝の北側から5m程の所を東西に同じ形状の排水溝が直角に設けられており、この東西の排水溝の南側に石灰岩風化物を敷き固めた基礎を確認することができたが、その大半は、過去のグラウンド造成作業で削りとられてしまって、建築物の構造をうかがうことはできなかった。

### (3) 古井戸と陶器製水道管

掘り出した古井戸は、ポンポの鉄パイプが差し込まれた状態で戦後に埋められたものである。

井戸は直径2mで東西がやや短い円であり、縁の大きさが地下にほぼ同大で降りている円柱形の井戸である。地上から2m途のレキ混入粘土層の部分は石垣積となっている。

### (1) 瓦

瓦は大別すると「癸酉年高麗瓦匠造」の銘入り高麗系古瓦と、表側にマンガンを塗り黒く光沢がある瓦に分けられる。出土量からすると圧倒的に後者が多い。特に後者の瓦の平瓦には6、7、814条の櫛目文が目立つ、またこの丸瓦には役瓦として固定のための穴を2つ開けたものも3個確認できた。

前、後者の瓦ともスラグ層の西側周辺から攪乱された状態で出土した。

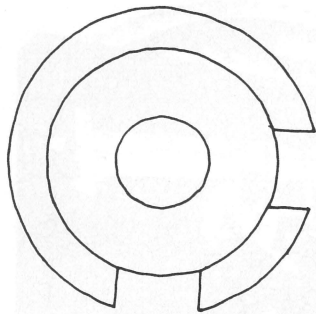
### (2) 磚

出土した磚は厚さが3cm、3.5cm、4cm、5.2cmの種類が確認できた。いずれも完形品はなく、大きな破片でも1/4程度の大きさのものである。胎土の色はほとんどが灰色で2～3褐色のものもある。

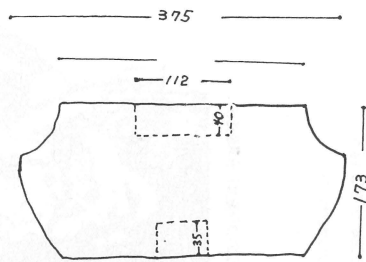
### (3) 礎盤

安山岩製の礎盤、2辺の横木を直角に受けるように角用として作られている。この礎盤はグラウンドの北側の隅で、戦前の校舎のガレキが埋められたその中から尖底鉄器と一所に工事中に掘り出された。

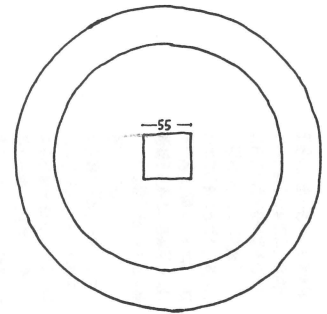




磁盤平面



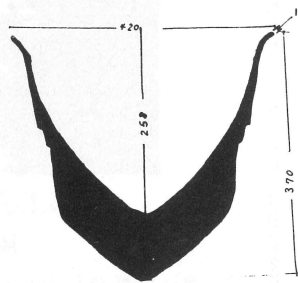
同立面



同底面

(4)尖底鉄器 (るつぼ)

鑄物を製造するために金属を溶かすつぼ。先述のとおり工事中に出土した。器中に金属を溶かしたことがうかがえる金属が付着している。



尖底鉄器 (るつぼ)

(5)貝・獣魚骨

出土した貝・獣魚骨はヤコウガイが77個、その他の獣魚骨は21個である。

出土したヤコウガイは形が完全なものはないので、殻頂、胎殻の部分が残っている個体数を数えると、出土した総個体数は77個で、主に建設工事で露頭したスラグ層の周辺から多く出土している。出土した貝はほとんど螺肋の部分が帯状に割られており、中には図版の写真でみるように割り取るために穴を開けた形跡が確認できる。

(6)石器 (材)

岩石が44個出土した。その中でヤコウガイの貝加工に使用されたと考えられる黒色の粘板岩が36片含まれており、この中には刃の部分を磨いたものや敲打痕が確認されるものもある。



用地造成中に発掘された貝摺奉行所跡と考えられる遺構（市立城西小学校内）

## 王朝時代の貝摺奉行跡か

首里 城西小  
新校舍工事現場で発見

琉球王朝時代に漆工芸をつ 馳した奉行。一六二二年に任 命された記録はあるが、設置 所跡と考えられる遺構が、初 代はわかってなく、現存は二 十四号の一辺 とほか一部しか発見されてい ないが、遺物としてはかなり 大きい。また、東側より別 の溝も猪脚、古井戸は守礼門 の古地図によると「御細 工所」と記されている。用地 造成中の発見で、二百から那 からは御細（へで）に用い られる夜光貝と十八世紀末ま で使われていた灰色瓦が大層 に出土した。また円筒寺に使 われたものと同じ牡丹模様の 軒瓦や青磁器の破片も見つ かった。

貝摺奉行は、王府で貝摺師 や絵師ほか漆関係の匠夫を管 理した職制に関する資料は乏 しい。歴史をひもとく重要な 発見だと説明する。

現在、溝は二十四号の一辺 に十分な費用と時間をかける 必要があると慎重な調査の 必要を述べていた。また現場 からは五十、二十五の不 発跡、小銃跡も見つかり、歴 戦地首里をしのばせていた。

## 漆工芸用の夜光貝 灰色瓦、青磁器も

作する御細工所があった場 所。那覇市教育委員会では、 ないかとの見も。しかし、こ の瓦が焼けているのはなぜ かとの疑問も、いずれし い陶磁器の破片なども出土し

## 王府時代の鍛冶屋跡？

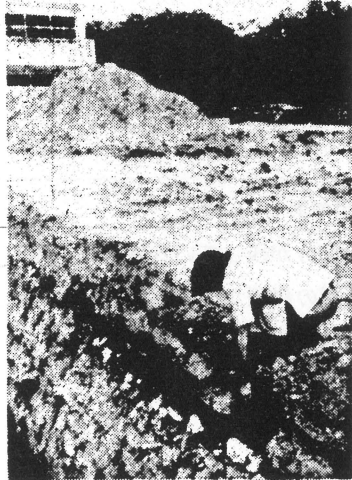
### 運動場から黒色スラブ層

城西小

この地層が出てきたのは運 動場中央部分。地表四十五セ 下の部分に厚さ三十五、長 さ五五に渡り現れた。鉄カス の固まりのよきな地層の下に は焼けた石敷き詰められて いる。城西小学校は、琉球王 府時代、細工物や工芸品を製

（これまでの調査では「鉄製 ても科学的に年代を判定する 品を分離したカスの鉄滓で、 には一年を要するといいが、 日まで工事を中断、出土物を 収集、記録保存するための発掘 調査をひ。）

は薄いといふ。しかし、場所が御細工所跡



琉球王府時代の鍛冶屋からでた鉄カスかと騒がれている黒色スラブ層—那覇市立城西小学校

# 貝摺奉行所の跡か

城西小校の  
造成工事現場

## 石積み側溝見つかると 王府時代の遺物出土

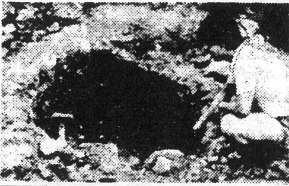
### 王府時代の遺物出土

「歴史の書に赤かわら校舎の裏が描かれていた高江州立城西小校（高江州奥校舎）の造成工事現場で、先月「御治屋（か）跡」とよばれる鉄製の面またたき黒色スラブ層が出現し話題になったが、今度は近くから新たに石積みの側溝、古井戸がみつかり、「これは琉球王府時代に工事全般を管理していた官庁（かいすじ）奉行所跡らしい」と興味ある推測がなされている。工事現場からは細砂（ひ）で心骨の材料に使用したとみられるおびただしい量の夜光貝、古びた陶磁器片、古銅なども出土しており、第二次大戦で破壊された高麗城の貴重な遺跡の一部として、きわだった発掘調査が関係者の間で望まれている。

遺跡などが見つかったのは、出土木材のため那覇市教育委員会で六月十日までの予定は、守礼門のすぐ下の遺跡に掘られていた場所。校舎の工事スタート後、緊急発掘調査に入っていた。その結果、十四日までには新たに約二十四四六に伸びる雨を流す側溝、その南側に古井戸跡、さらには半個には夜光貝、円筒形の初期（十六世紀）ころの工事中、黒色スラブ層のほか大層の夜光貝など



「御細工所の近くから発掘された石積みの側溝」城西小の造成工事現場



見つかった古井戸

後十一七世紀前半）に使われた砂（の）がわらの紋様（に）をかきわけて、灰塗りの陶磁器片、寛永通宝の古銅などの出土を確認した。出土状況や一七〇〇年代を想定して作製された裏手納宗徳臣の「首里城古地図」に記載されている「御細工所」から発掘調査に立ち会った知念勇典立派博物館主任学芸員（古学）は「出土状況、そして首里の古地図から判断して、かつての官庁奉行所跡と推測される。資料が乏しく歴史的によく知られてはいない職制であ

り、きちんとした遺構を開掘調査できず、不明では」と話している。また、古地図の製作者で那覇市文化財審議会委員の藤手納宗徳氏は「単なる銅製原料の採掘場所だったという意見もあるが、御細工所跡らしい目撃者も推測している。はっきりとわかるためにも県文化課による本格的調査が必要だろう」と話している。



スラグや陶磁器を包含した層，共同溝の基礎掘りに露頭した



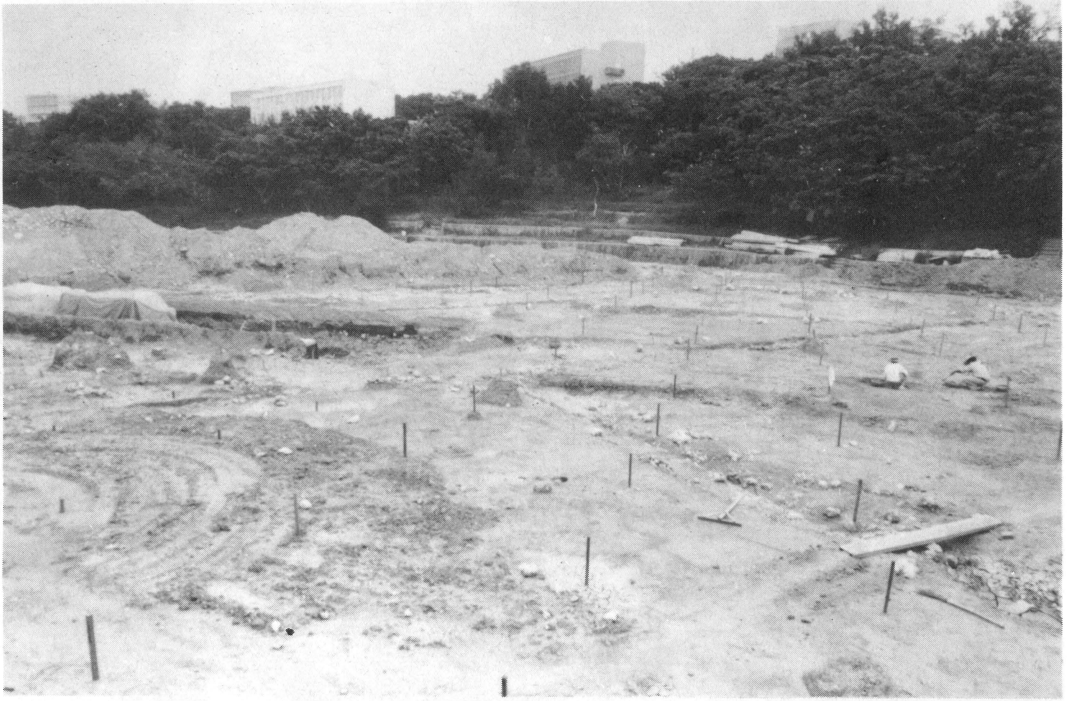
共同溝の西側断面礫混入の粘土層（攪乱層）奥側では多量のマンガン塗り黒色瓦が出土した



共同溝の西側断面黒色瓦と沖縄県・職工場と記入された陶器の包含層



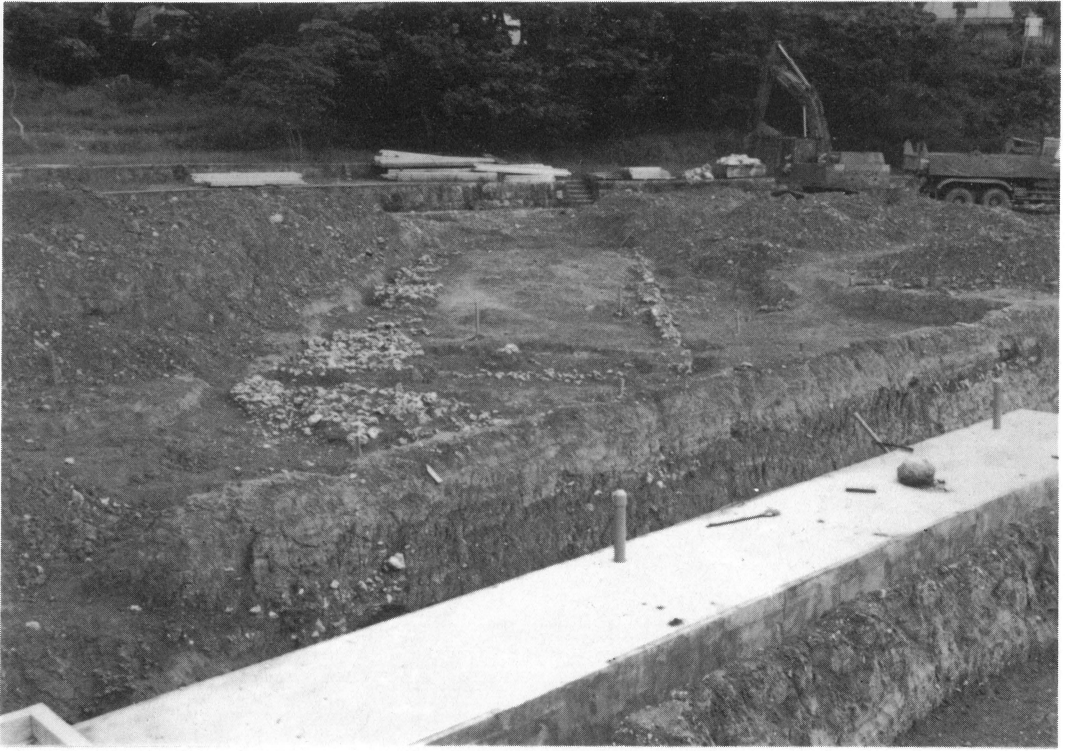
古井戸から西側に延びる陶器製水道管の先の凹地に投込まれた瓦礫



新宮町の発掘 トレンチの設置状況 西側より東側を望む 西宮市教育委員会



新宮町の発掘 トレンチの設定, 北側より南側を望む 西宮市教育委員会



石 組 遺 構



石 組 遺 構



排水溝



排水溝

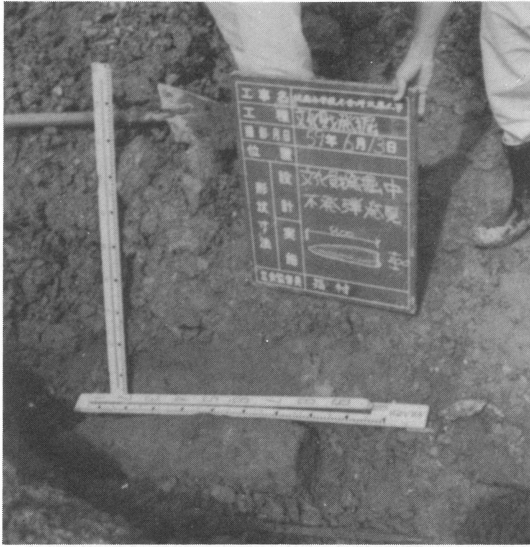




古井戸



陶器製水道管



発掘調査中に出土した不発弾



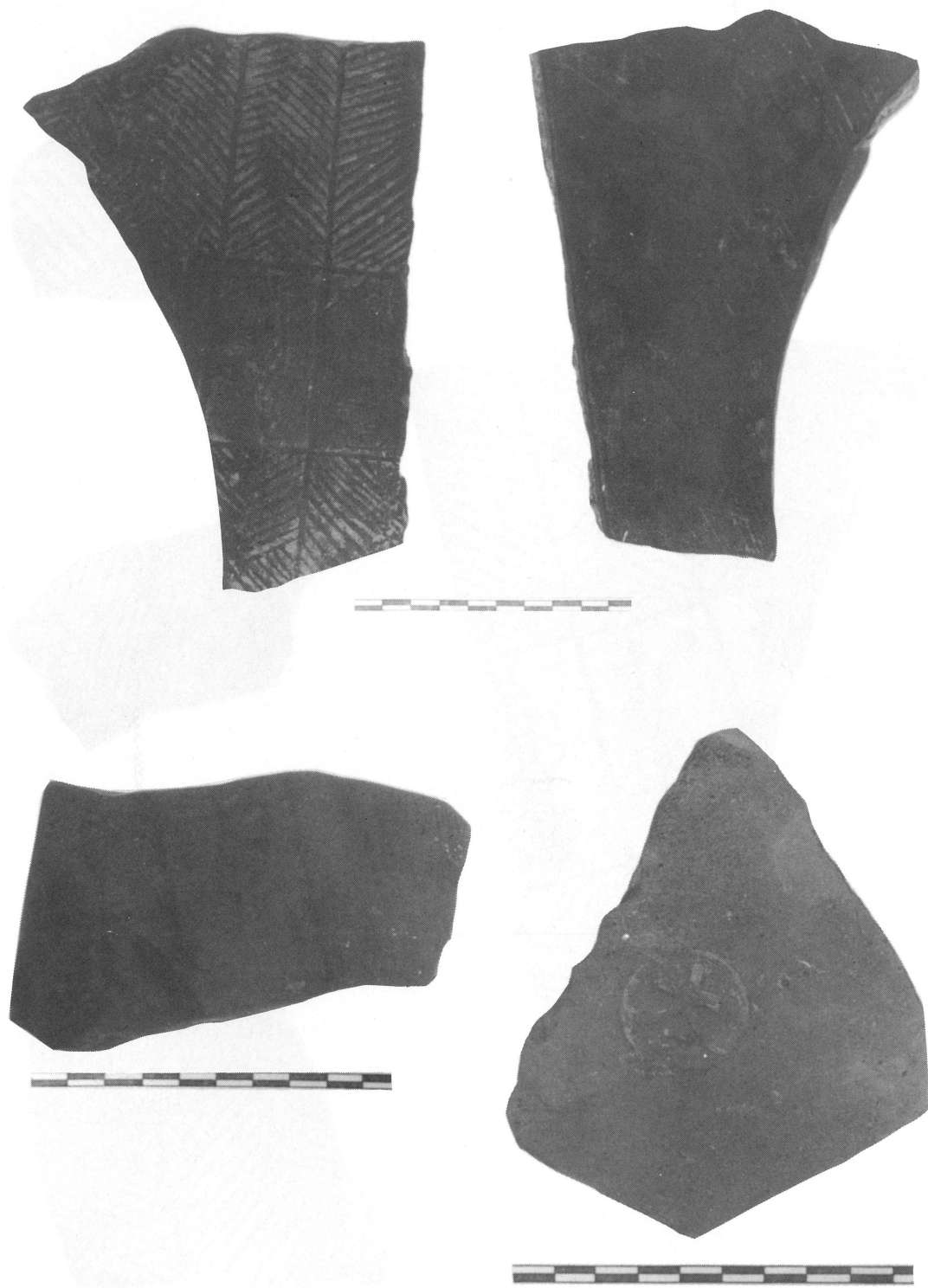
発掘調査中に出土した不発弾



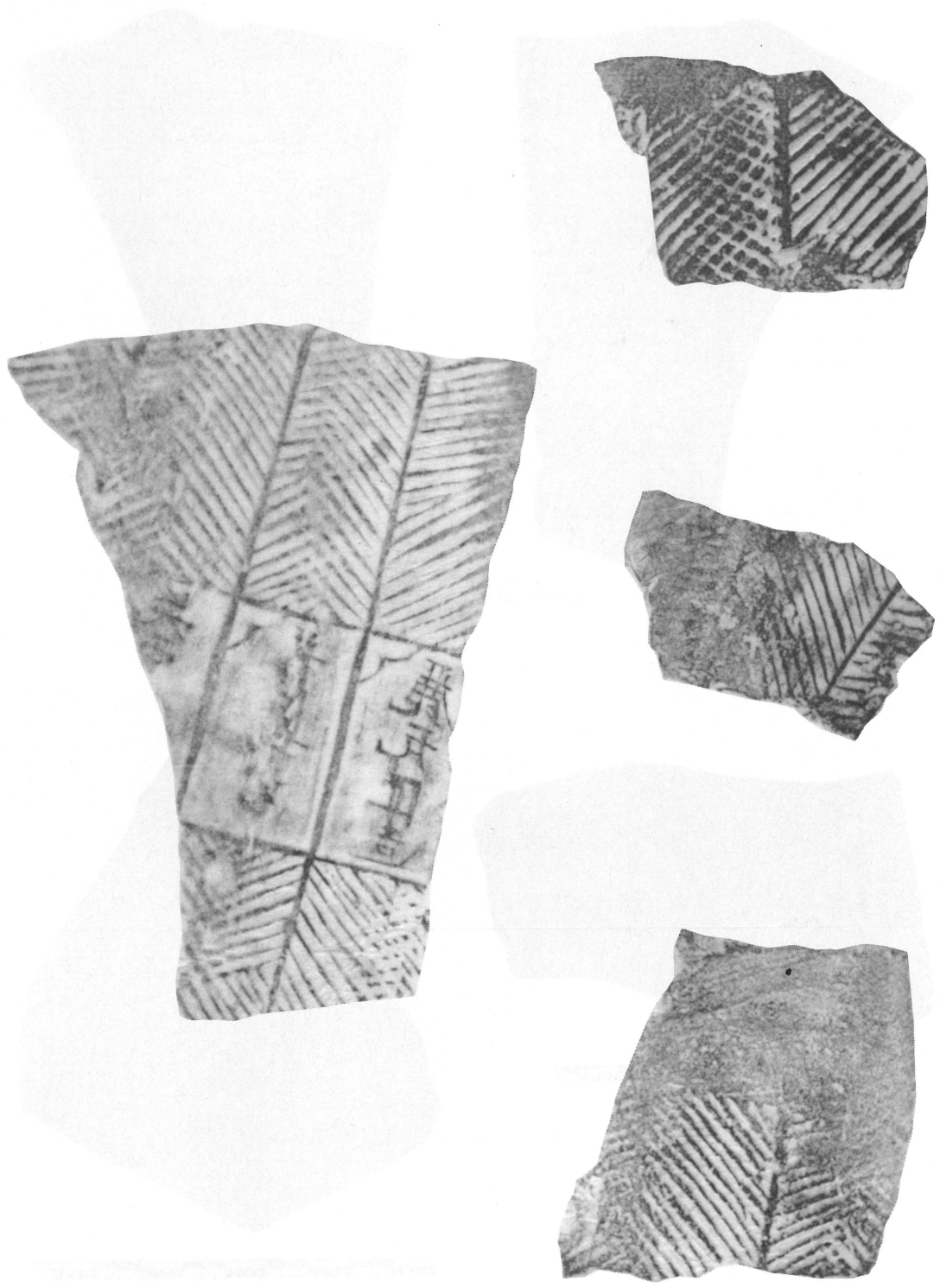
発掘調査中に出土した小銃の弾



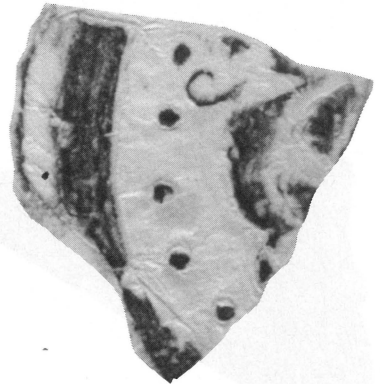
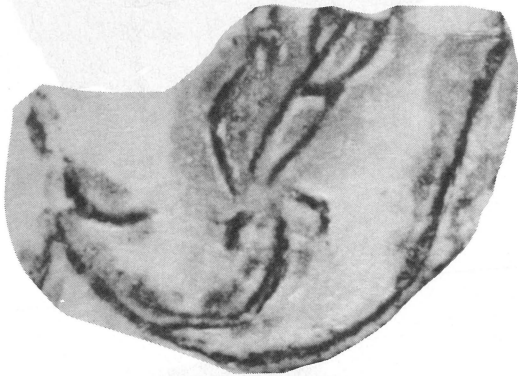
発掘調査中に出土した不発弾を処理する



「麗瓦匠造」文字入瓦等

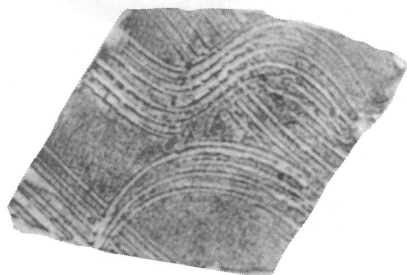
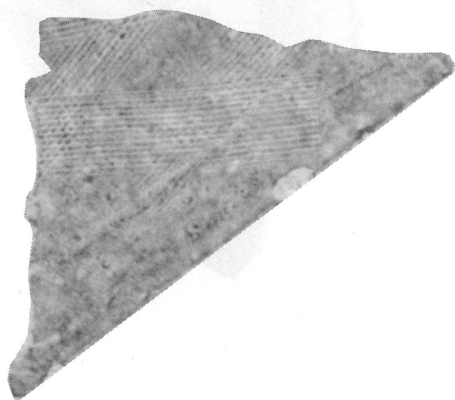
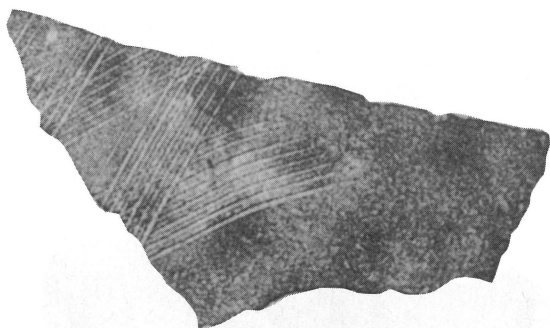
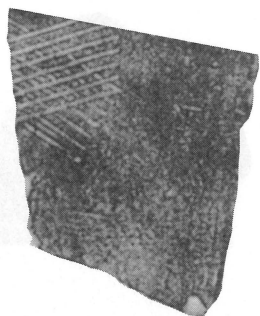
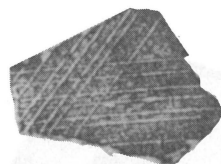
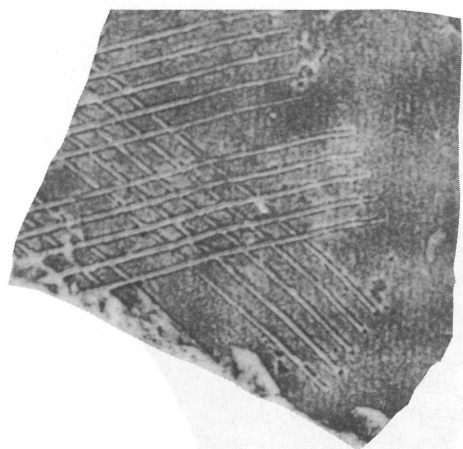


「麗瓦匠造」文字入瓦拓本

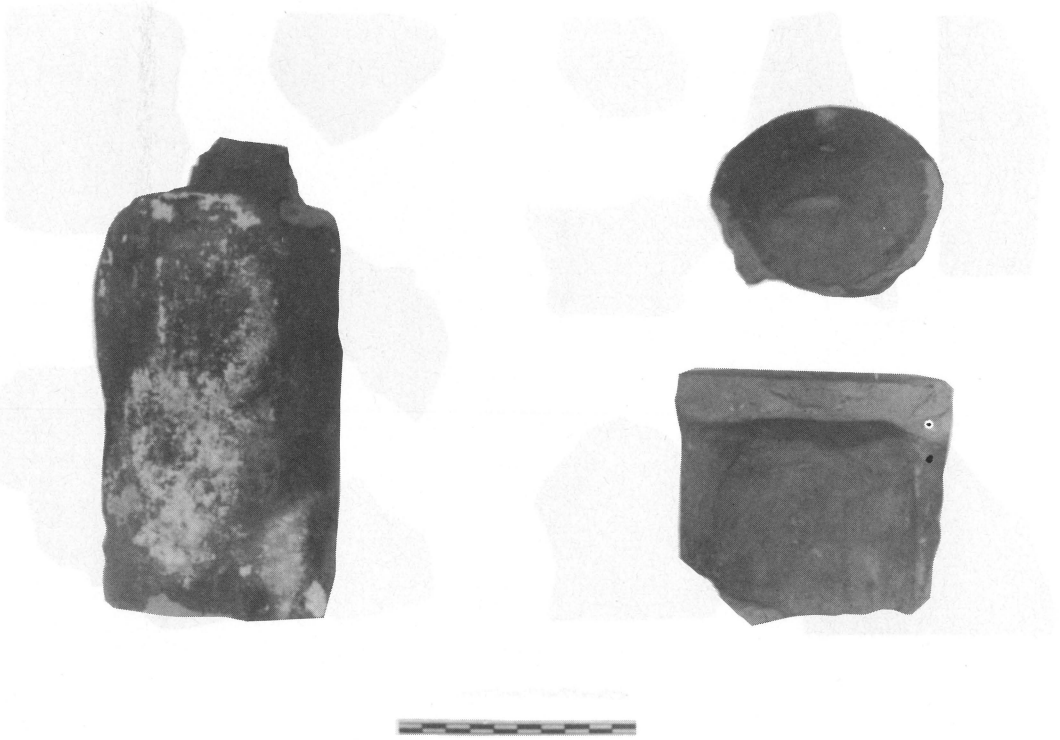
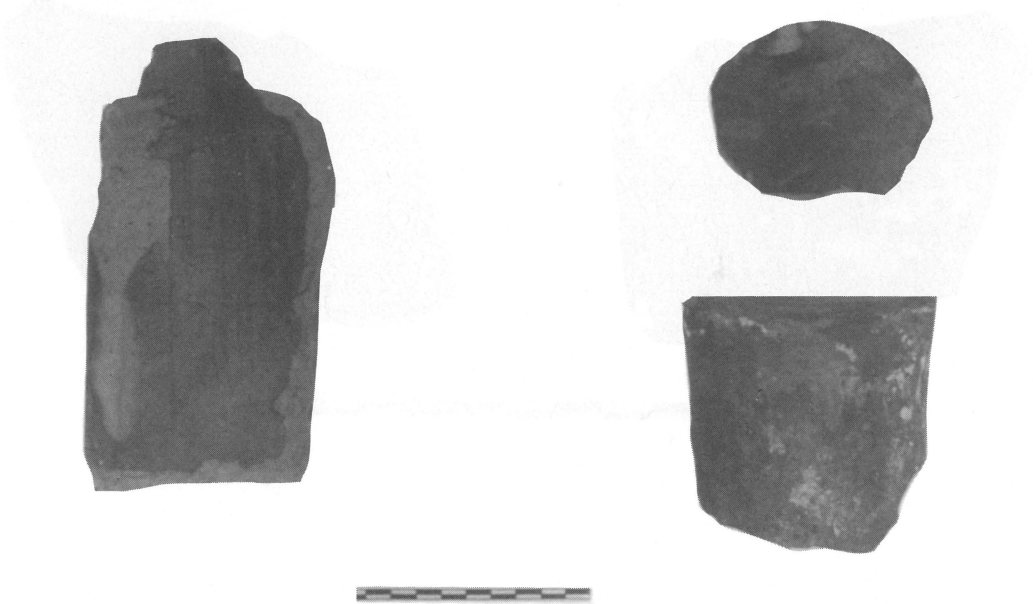


瓦の文様

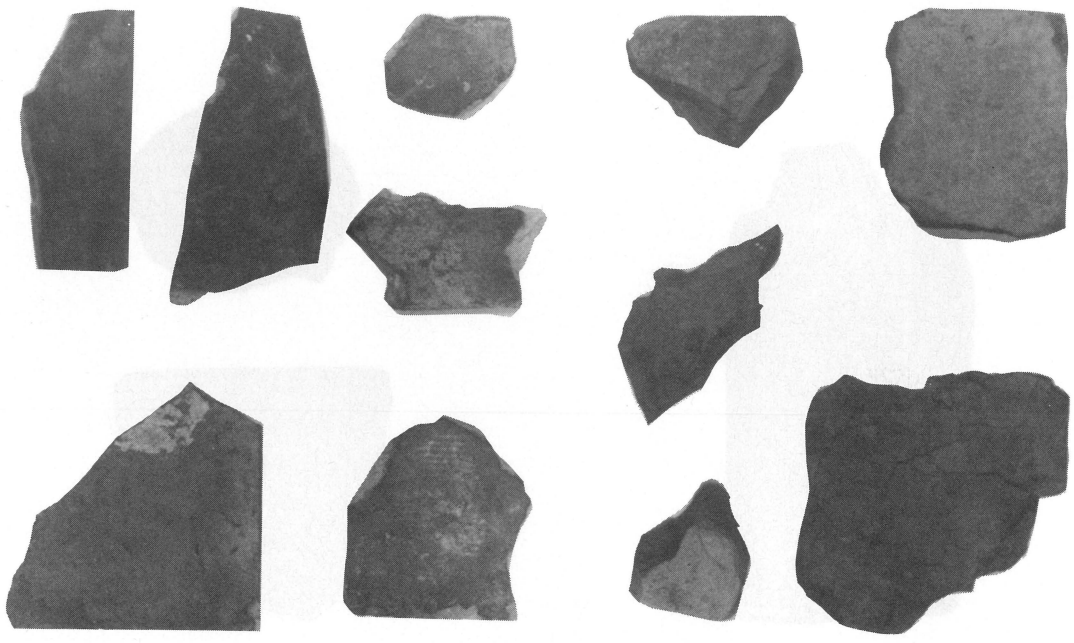
東京大学文学部考古学研究室蔵



黒色瓦に施された櫛目文様拓本

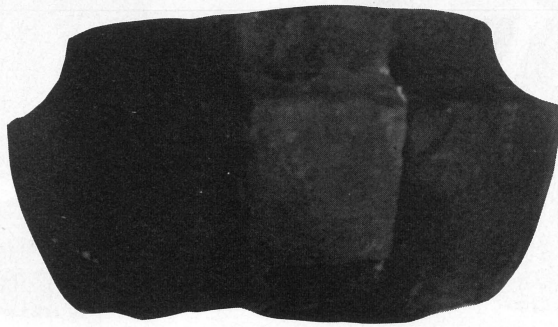
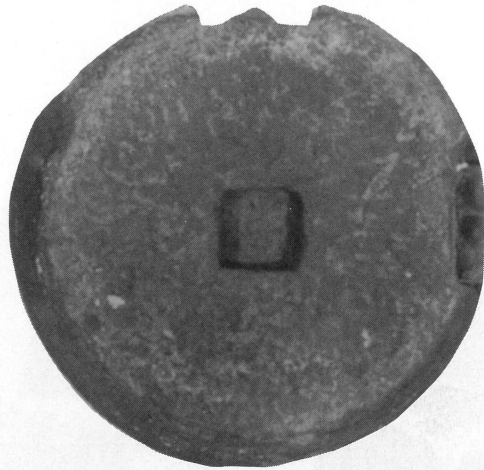


瓦

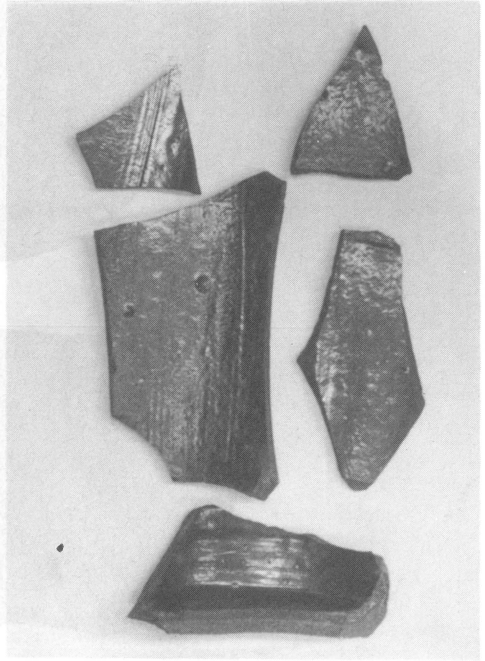
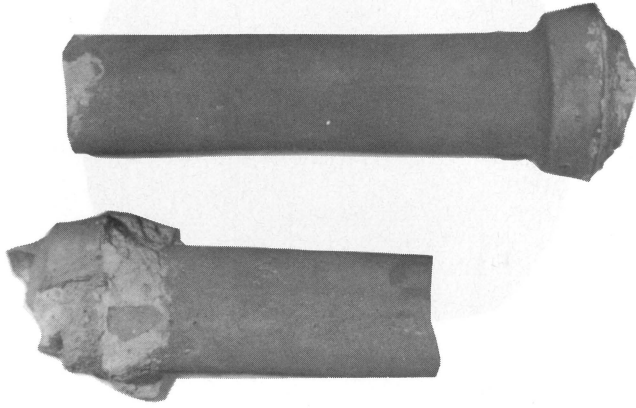
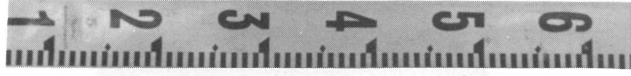


瓦 · 磚

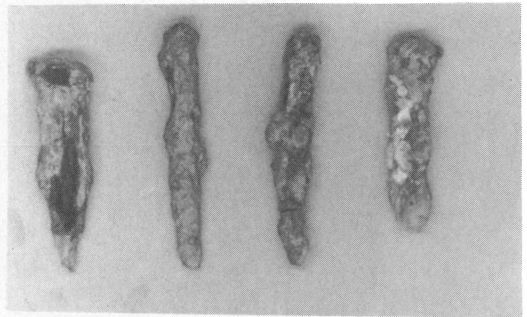
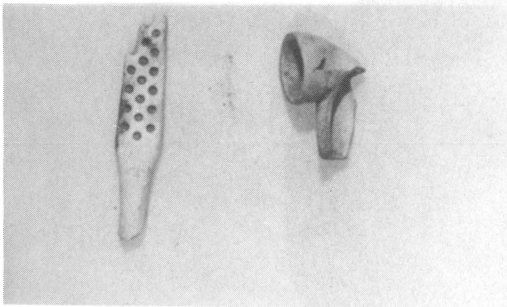
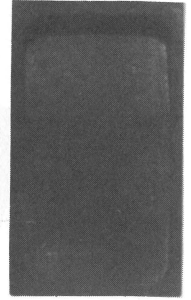
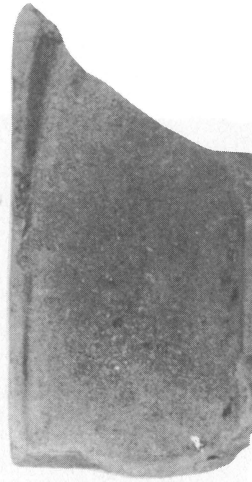
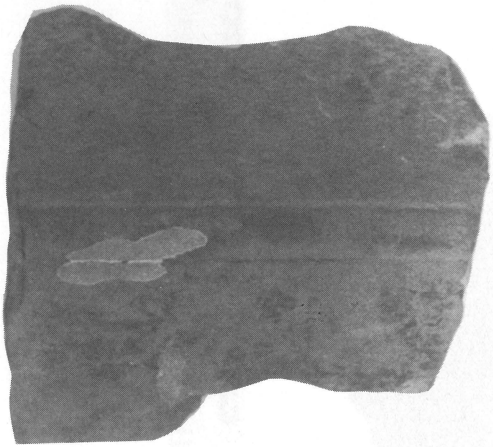




磬 盤



陶 器



石製品，骨製品，鉄製品



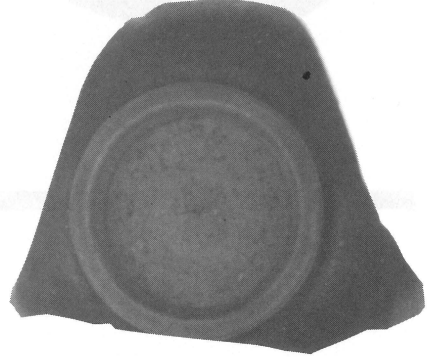
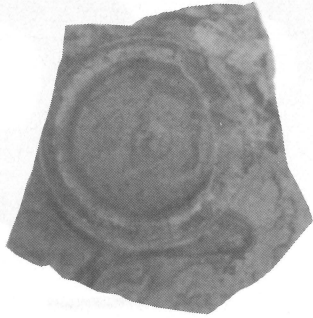
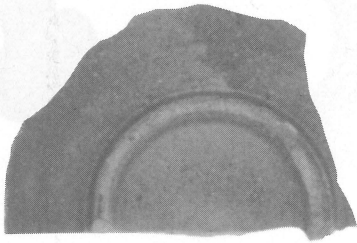
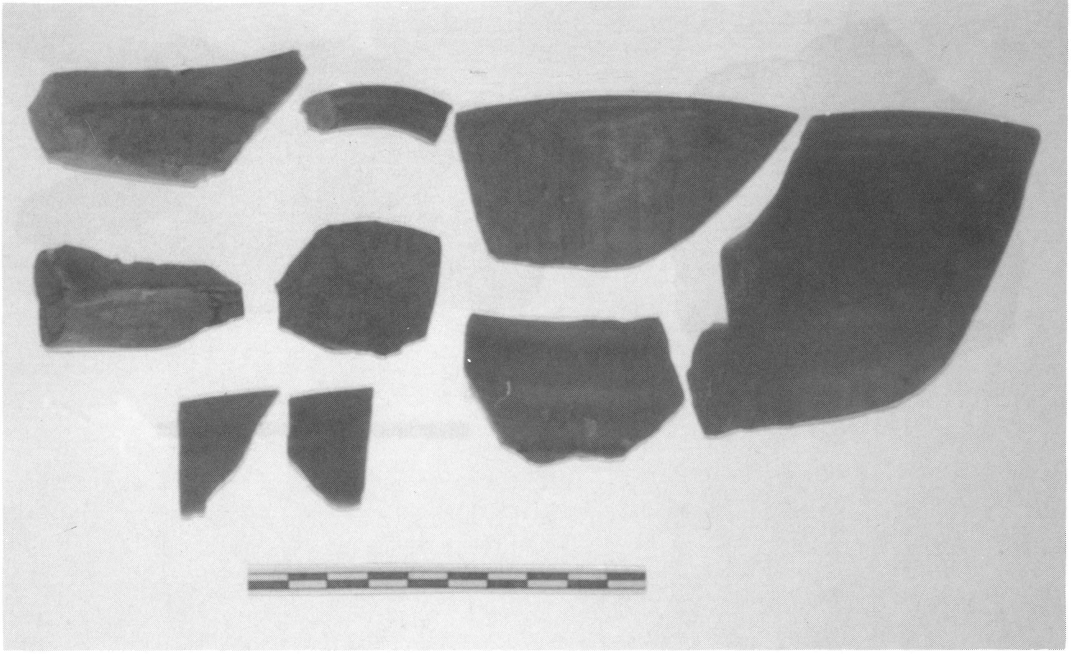
尖底鉄器（るつほ）



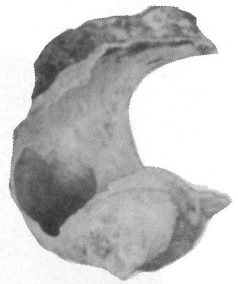
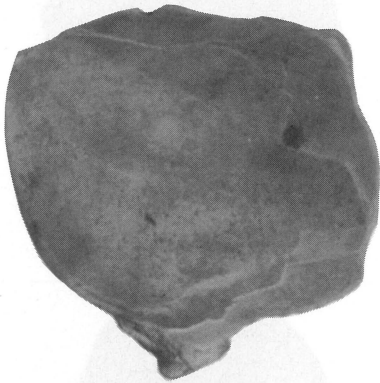
陶 磁 器



陶磁器

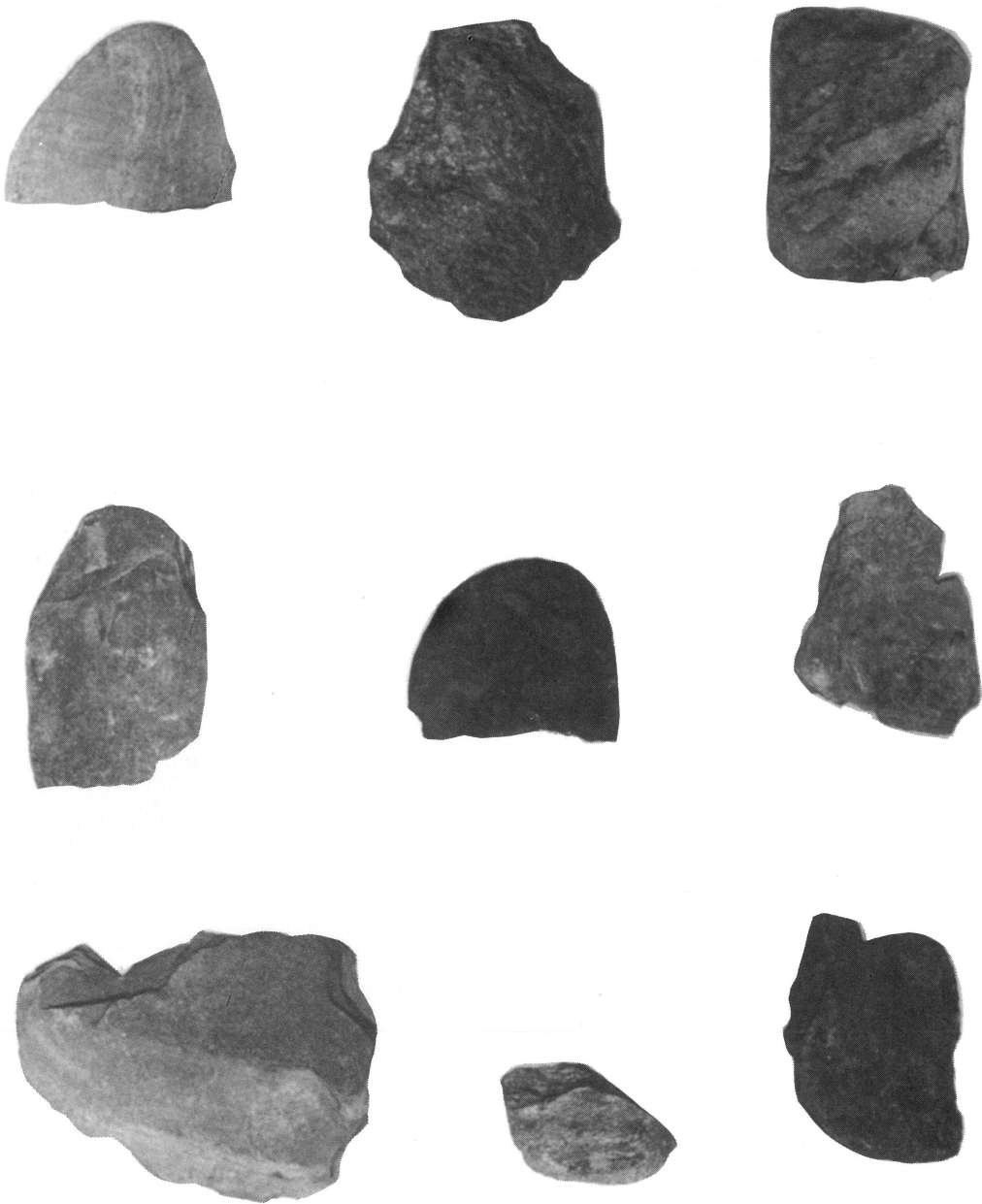


青 磁



夜 光 貝





石 器

## 御細工所跡緊急調査概報

(城西小学校校舎建設工事に  
伴う緊急調査概報)

昭和60年3月発行

編集者 沖縄県那覇市教育委員会社会教育課  
発行者 沖縄県那覇市教育委員会  
沖縄県那覇市樋川2丁目8番8号  
TEL 0988-32-4166

印刷 平山印刷  
沖縄県那覇市寄宮1丁目12番-3号  
TEL 0988-32-0177